

「主を賛美、そして互いにほめたたえ合う」

エペソ人への手紙 5 : 18 - 19

April.27.2025

エペソ人への手紙 5 : 18 - 19 (パウロ)

Preface

元々神と人間とは、互いにほめ歌を歌い合う関係でした。

人と人も、互いにほめ歌う関係でした。

しかし、これが壊れました。

聖霊に満たされるというのは、人が人らしくあること、本来の人の姿を取り戻すことだと思いますが、本来の人の姿こそ、神と互いにほめ歌を歌い合う関係です。

また人は、他の人とも、自分以外の他の人とも互いにほめ歌を歌い合う関係であり、神をほめたたえながら、互いに語り合う関係でした。

互いに、銃を向けて争う関係ではなかった。

互いに、足りないところや出来ないところを指摘し合う、裁き合う、卑下し合う、騙し合う、駆け引きし合う、ムカつき合う関係ではありませんでした。

Part One

創世記を見てみますと、天地万物の一切をお造りになられた後、神様は、「非常に良かった」と思われた、または口にされただろうことが見て取れます。

神様は、人以外の被造物を先にお造りになられ、最後に人をお造りになられました。

人以外のものをお造りになられた時には、「良し」とされただけでしたが、（もちろん、これも素晴らしい褒め言葉だと思いますが）他のすべての被造物をお造りになった後、最後に人をお造りになられた時には、「非常に良かった」と、そこに人という存在が存在するようになったことを特別に喜んでおられるかのように、ほめたたえなさいました。

なぜならば、実際、人は神にとって特別な存在でありました。

人のみ神のかたちに、神の似姿に造られたからです。

神のかたち・神の似姿とは、目とか、鼻とか、口とかという話ではなく、神の品性を持つ者として人は造られたということです。

では、神の品性とは何か？

創世記 1 章の記述を見ますと、神様は、人以外の被造物をお造りになられた時には、「神は」という単数形の主語をもってお造りになられましたが、人をお造りになられた時には、「さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう」と、ご自身のことを「わたし」とか、「神」という単数形の主

語ではなく、「われわれ」という複数形の主語を用いながら人をお造りになりました。

「われわれ」という表現は、父なる神、御子なるイエス様、聖霊なる神の三位一体の神様を表している言葉だと思われますが、この三位一体という完全なハーモニーこそが、聖書の教える神なるお方が神であられることの最も大きな特徴、(唯一の神に特徴という言葉を用いるのは失礼なことかもしれませんが)三位一体という完全なハーモニーこそが、最も大きな神のご性質、属性だと思います。

つまり人は、神のかたち・似姿に唯一創造された者として、自分以外のすべての存在との関係をハーモニー、調和、一致、共鳴し合い、呼応し合い、響き合う者として存在するようになったということです。

神が造られたすべての被造物がハーモニーを奏でる鍵となる存在が、人だったということです。

そして、そんな比類なきハーモニーなるお方、愛なるお方である唯一無二の三位一体なる神様は、「われわれのかたちに人を造ろう」と宣言されながら人をお造りになった後、その喜びを「非常に良かった」という言葉をもって、歌って下さいました。

私は、ここで、神様は歌ったんだと思っています。

なぜ、この「非常に良かった」という言葉を歌だと思うのかと言いますと、ゼパニヤ書3章に、神様が人のことを、愛する人々のことを「歌いながら喜ばれた」という言葉があるからです。

ゼパニヤ書3：17 (パワポ)

「高らかに歌ってあなたのことを喜ばれる」と、神は歌を歌われるお方です。そして、その歌は、人に向けられた歌です。

神は、音を奏でるお方であります。

神こそ音楽の初めであられ、音楽の源なるお方であり、「人はなぜ音楽をするのだろうか」という理由は、神のかたちに造られた者であるがために、人は音楽をするということになるでしょう。

神が音を奏でるお方だから、人も音を奏でるという人類の音楽の起源を示してくれる貴重な聖書箇所が、このゼパニヤ書3：17だと思います。

なので、創世記1章の、人を三位一体なる神のかたちにお造りになることをもってその創造のわざを締めくくりになられた神さまが発した「非常に良かった」という言葉は、無味無臭な、感情のこもらないただの口先だけの言葉ではなく、喜びほめ歌を歌った歌詞のようであったと思うのです。

そして、そのように造られた三位一体なる神のハーモニーを、その身に、その霊に完全に帯びていた最初の男アダムと最初の女エバは、互いの存在をほめたたえ合いながら、喜び合いました。

正に、今日の聖書箇所エペソ書の言葉のように、詩と賛美と霊の歌をもって互いに語り合うかのように、喜び歌い合いました。

それが、創世記 2 章にある人類最初の音楽、アダムがエバに歌ったラブソングです。

創世記 2 : 2 2 - 2 4 (パワポ)

「これこそ、ついに私の骨からの骨、私の肉からの肉」、即ち、「あなたは私、私はあなた、あなたと私は一つで、ハーモニーだ」と、共鳴し合い、呼応し合い、響き合い、一致する者として神によって造られたことを、最初の人アダムとエバは、互いの存在を互いに歌いながら喜び合いました。

体から湧き上がる本能的な音をもって、自然な音楽を奏でながら、互いの存在を喜び合いました。

これが、元々の、本来の人の姿であり、人と人との関係であり、神と人との関係であり、人と人以外の造られしすべての被造物との調和した、ハーモニーの関係でありました。

Part Two

ところが、今の世界はどうでしょうか？

互いが互いに喜びの歌を歌い合う、詩と霊と賛美の歌をもって語り合う世界ではありません。

神をほめたたえることを忘れた世界。

そんな世界を作ってしまった張本人が、人です。私たち、神を見失った人間です。

人ゆえに人が苦しみ、人ゆえに草花が苦しみ、人ゆえに動物が苦しみ、人ゆえに地球という生命体が身悶えし、地球の外にある宇宙にまでも、人が作り捨てた宇宙ゴミが溢れているように、ハーモニーではない姿を仕立ててしまっているのに、それでも涼しい顔して、人間賛歌に明け暮れています。

経済だ、科学だ、文明だ、競争だと、名誉ある何とか賞授与だと、致命的な傷を隠すかのように、互いに嘘っぱちと言いましょか、空虚な称賛をし合いながら、または蹴落とし合いながら巡っている世界。

創世記 1 章 2 章の世界とは、似ても似つかないような世界にしてしまいました。

あからさまな武器だけでなく、言葉をもって、視線をもって、表情をもって、醸し出す雰囲気をもって、学をもって、財力をもって傷つけ合う、殺し合う世界、私たち一人一人の人間です。

嫌な人、腹立たしい人、赦せない人、残念だと思えてしまう人を思い浮かべるのは、私たちにとってそんなに難しいことではないでしょう。

それが、いつどこから始まっているのかと言いますと、創世記3章の時から始まっていますよね。

神とのハーモニーの中に生きていた人間は、そのハーモニーを、神に対する裏切り行為をもって壊してしまいました。

その裏切りを、直ぐに、素直に、神様にもし認めていれば、こんな事体にはなっていなかったでしょう。

裏切りを認める代わりに、「神よ、私はあなたにそんな裏切り行為をした覚えはありません」と、どこまでも自分の正しさを主張し、間違っていないことをアピールしました。

「神とのハーモニーを壊すことが、人間にとっての自由だ」と、「束縛からの解放だ」という悪魔のそそのかしに自らの意思をもって進んで乗っかり、「サタンよ、あなたのご助言通りです」と、神とのハーモニーを壊しました。

神をほめたたえることを捨て去りました。

すると、あれだけ、「素晴らしい、美しい、美しい、あなたは私自身だ」とラブソングをもってほめたたえていた、互いに無二のパートナー同士だった最初の男アダムと最初の女エバが、互いに責任をなすりつけ合い、ののしり合い、のろい合ってしまう関係に陥ってしまいました。

これを、「人間の墮落」と、神学用語で言います。

そんな二人から生まれて来た二人の息子、(創世記4章にある内容ですが)長男カインが、弟アベルがムカつく、気に食わないと、目障りだと、馬鹿にすんなど、殺してしまいます。

人類最初の殺人は、家族の中で起こりました。

かつて神様が、「非常に良かった」と喜び歌った世界の姿とは、全く違う姿へと成り果てた姿がそこにはありました。

それからというもの、人は、人を恐れるようになりました。

人にとって最も怖い存在が人となり、他者への恐れを凌駕しようと力を身に付けようとし、します。

武力を、財力を、学力を、そして、一人の妻では欲を満たすのに物足りない、また力を誇示するために、男は、複数の女を人格ではなく物のように扱い所有しようとし、しました。

また、本来備わっていた音を奏でる、音を奏でながら神の素晴らしさをほめたたえ、神をほめたたえることをもって、人同士互いに語り合いほめたたえ合うという本来の音楽を忘れ、または捨て去り、競争の道具とし、人との違いを誇る道具とし、プライドを立てるための道具とし、自分たちの欲望を吐露し、

発散し、悲しみを、空しさを、やるせなさを、怒りを、競い合いながら奏でる神なき神を忘れ去った、本来の姿とは違う音楽という世界を作り出していきました。

さらには、青銅や鉄を用いてモノづくりをし、神への感謝もなく天然資源を搾取しながら、自分たちの願う思い描く富なる世界を築く工業文化を作り上げ、それを最終的には武器へと転化させ、戦争文化へと移行させていきました。

そして、それらのありとあらゆるモノづくり、神なきモノづくり、神とのハーモニーを失ったモノづくり、人と人とのハーモニーよりも、競争や比較や優劣や自己主張に重きを置くモノづくり、それらを芸術と称しながら、何とか神無しでも楽しく生きようと、人は神なんか無しでも生きられると、空虚な活気を創作し続ける世界となりました。

私が言っていることではありません。

創世記4章に書いてある内容です。

創世記4章には、「非常に良かった」という神の言葉、ハーモニーという言葉の代わりに、突如として出てくる言葉があります。

創世記1章2章の世界では思いつくことさえ出来なかった言葉が登場してきます。

「復讐」という言葉と、「殺す」という言葉です。

Part Three

なぜ人は、そんな風になってしまったのか？

「いのちの息」を失ってしまったからです。

「神の霊」を失ってしまったからです。

神様が、「人をわれわれのかたちに造ろう」と仰せながら人をお造りになった時、これ無くして人は、神のかたちであれないという大事なことをなさいましたよね。

神のいのちの息を、人に吹き込みました。

神の霊を、人のうちに入れるということをなさいました。

ところが人は、神とのハーモニーを壊す、神との関係を壊すという墮落をその身に招く罪人なりますと、神の霊が人のうちにとどまることが出来なくなってしまうのです。

創世記6：3（パワポ）

実際、人は今、120歳以上生きられませんよね。

吹き込んで頂いた神の霊を忘れたかのように、「復讐」と「殺す」ということに没頭するただの肉の塊に過ぎないような存在になってしまった人類に、神の霊がとどまり続けることが出来なくなっていました。

神様は、人を失うことが残念でたまらなかったのでしょうか、あわれみ深く、

情け深く、怒るのに遅く、恵みとまことに富みたもうお方だからなのでしょう
か、「復讐」と「殺す」ということで世界を回すようになってしまった世界の
人々から、神の霊が即座に離れなすることはありませんでした。

むしろ神の霊は、そんな彼らに留まっていて下さいましたが、もうどうにも
こうにも、神の霊がその内にいるとは思えないような生き方・様相になっていた
のでしょう。

遂には、神の霊が人のうちにとどまることが止まり、神の霊を失ってしま
いました。

ちなみに、「殺す」という行為は、実際に人の肉体を殺めて、人の命を奪う
ということのみならず、イエス様が仰ったように、「バカ」と人に向かって言
っただけで、思っただけで、人を見下しただけで、心の内で裁いただけで、も
うそれすべてが殺人です。

つまり人は、イエス様の、神様の基準からしますと、誰もが殺人者だとい
うことです。

私たち皆、殺人者です。

かつて備わっていた完全なハーモニーを失ってしまった殺人者です。

Part Four

そして、今日の聖書箇所です。

エペソ人への手紙 5：18－19（パウロ）

酒に酔うということは、変に大胆になることだと前回見ましたが、神無しで
も人は楽しく生きられる、生きようとする、神なき空虚の中に喜びを見出そう
とする人の空しさの目に見える最も分かりやすい現れ、姿、表現が、酒に酔う
ということなのかもしれません。

それに対して、御霊に満たされる（聖霊に満たされる）ということは、人間
本来の満ち足りた、充足している、満足を回復する、回復させて頂いた姿です。

神無しの喜び、楽しみ、繁栄という空しさ、まやかし、蜃気楼から脱した姿
ですね。

三位一体なる神というハーモニーなるお方とのハーモニーな関係を回復させ
て頂いた、決して満たされることのなかった大きな空洞を満たして頂くとい
うことですよね。

失ったいのちの息を、神の霊を今一度与えられて、神とのハーモニーの関係
に入る。

人間本来の姿を取り戻させて頂く。

正に復活、よみがえりと言ってもいいかもしれません。

すると今度は、人同士の本来あったハーモニーの関係にも気付かされ、入れ

られます。

「詩と賛美と霊の歌をもって語り合う」という関係です。

詩とは詩篇、つまり、神への祈りを音をもって奏でること。

賛美とは、神をほめたたえたいという思いを回復させて頂いた本能を、音に合わせて奏でるオリジナルソング。

霊の歌とは、上手だろうが下手であろうが、音痴だろうが美声であろうが、神をほめたたえる全ての音楽。

つまり、「詩と賛美と霊の歌をもって互いに語り合う」とは、神との関係回復の中にある人との語り合い、互いに喜び合う関わり合いですね。

Part Five

私がクリスチャンになって一番嬉しかったことと言いましょうか、それまで知らずに過ごして来て、新しく与えられた、回復させて頂いた楽しい喜びが、神を音楽に合わせてほめたたえる賛美でした。

それまでも音楽は好きでした。

ピアノを習っていたこともありましたが、鼓笛隊で中太鼓を叩いたり、高校生の頃は友達が組んだバンドのドラムとして入れてもらったりもしました。

音楽はジャンルを問わず、みんな好きでした。

父が50歳の頃に生まれたということもあってか、小さい頃から「演歌の花道」みたいな番組を父と一緒に自然と見ているうちに、私の中での最初の憧れのミュージシャンは、五木ひろしさんとなりました。

クラシックも好きですし、高校生の頃はメタリカというヘビメタバンドの横浜アリーナでのコンサートに行って、あまりの大音量に耳をやられてしまい1週間ピーツという耳鳴りが消えなかったこともありましたが。

東京ドームでのマイケル・ジャクソンのコンサートにも行き、そこで、ガンズ&ローゼズのギタリスト・スラッシュのギターを聞くことも出来ました。

好きだったTMネットワークの最後の東京ドーム解散コンサートにも行きましたし、大学生の頃行ったアメリカでは、エアロ・スミスのコンサートにも行きました。

フォークソングも好きですし、フォルクローレのような民族音楽も好きでした。

音楽が好きで、小さい頃から色々な音楽に触れてきましたが、神をほめたたえる賛美に出会い、礼拝の中で賛美を歌いながら、涙がスッと自然に流れ出て来た時から、賛美が、私の中で音楽になりました。

先程のゼパニヤ書にもありましたが、神をほめたたえるということと、神が私たち人を、そして、ご自身お造りになられた被造物をお歌いになりながら、喜ばれるということが、本来の音楽なんだということを知りました。

なので、賛美ならば、どんな音楽でも、声を大にして歌いたいですし、躍りたいですし、ずっと聞いていたいです。

賛美という音楽の起源を知るようになりますと、神なき音楽の空しさと言いましょうか、どんなに華やかに、あでやかに、美しく、カッコよく、可愛く、力強く、奇抜に披露され奏でられても、その音楽を聴いた後の空っぽ感と言いましょうか、ザワザワ感と言いましょうか、何とも言えない寂しさ、空しさを感じるようになりました。

でも、神をほめたたえる賛美には、空虚感が、空しさが一切ありません。

むしろ、満たされ感、ワクワク感、喜び、慰め、癒し、励まし、この内側がいっぱいになります。

時には静かに、時には爆発のようにいっぱいになります。

賛美を知って一つ不思議なことが私に起こったのですが、それは、ギターを弾きたい、ギターを、賛美を歌うためならと弾けるようになったということです。

クリスチャンになる前、ギターを弾きたいと思って何度かチャレンジしたのですが、指が全然動かないんです。

でも不思議と、賛美を歌うためだと考えると、指が動くんです。

それで大学生の頃、私の住んでいるアパートに友人たちを集めて、私が下手なギターをかき鳴らしながら賛美を歌い、バイブルスタディーをしていたこともありました。

そうして、神の言葉が私の歌となりました。

主なる神様が、イエス様が私の歌となりました。

詩篇 119 : 54 (パワポ)

エレミヤ書 17 : 14 (パワポ)

申命記 10 : 21 (パワポ)

詩篇 22 : 3 (パワポ)

賛美に出会う前までは、なんか変に人と語り合いたいと思っていまして、「今度、ゆっくり語り合おうぜ」みたいなことをよく言っていたように思いますが、イエス様の愛に触れられ、イエス様を知り、神様を知ると、人と変に語り合いたいとは思わなくなりました。

なぜなら、たぶん、語り合いたいと思っていた何かいつもモヤモヤしていたものが、晴れてしまったからなんだと思います。

自分という存在は何者なのか？

どう生きれば、生きているという実感を持てるのか？

どこから来て、どこに向かっているのか？

何で人は生きるのか、存在しているのか、世の中の正義や悪等々の、人ならば誰もが持っているモヤモヤとした空虚感が晴れてしまったからなんだと思います。

神によって造られ、神が初めであり終わりであられ、イエス・キリストこそ

見えない神のかたちなる神であり、その方によって愛され、赦され、救われ、期待されているという人間の本質を知る上で最も大事なことを知ってしまったら、変に語り合いたいと思うことがなくなりました。

ましてや、お酒を飲みながら語り合うなんていうことに、何の魅力も感じなくなっていました。

ただただしたいことは、詩と賛美と霊の歌をもって互いに語り合い、主に向かって心から賛美し、歌うことです。

なので、私にとって、朝一に皆で祈り、皆で賛美し、皆で聖書の御言葉を分かち合い説き明かす早天祈祷会は、何よりも楽しい時でありますし、喜びです。

当然、サーフィンよりも楽しいです。

その時間のないサーフィンの空しさと言いましたら、何とも表現し難い乾いた風のような、すきま風のような空しさだったことを覚えたことがあります。

Conclusion

イエス・キリストを我が救い主として信じられるように聖霊に触れられ、そして、イエス・キリストを証しする証人としてなるために聖霊に満たされた信仰者ならば、詩と賛美と霊の歌をもって互いに語り合うことに、使徒パウロ先生の勧めに従って熱心でありたいと思います。

神をほめたたえるという本来備わっていた本能的音楽性を回復させて頂いた者として、イエス様を心から賛美し、歌いながら、自分以外の人と、神の家族と、キリストにある兄弟姉妹たちと互いに、足りないところや出来ないところを指摘し合い、裁き合い、卑下し合う代わりに、ほめたたえ合いたいと思うのです。

せつかく、本来の人間らしさを回復させて頂いたのですから、その人間らしさを大いに発揮しながら、喜び合いながら、ともに生きて行きましょう。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ 5：18b－19